

〈悲劇を乗り越えて〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

カンボジアと聞くと、まず観光としてのアンコールワットの遺跡群、歴史的には一九七〇年代後半のポル・ポト政権による悪名高い暗黒時代というのが一般的なイメージである。だが、同国初の女性監督ソト・クオーリーカー監督は、そうした外からの目ではなく、カンボジア人自身の経験と気持ちを内側から描く本当のカンボジア映画を撮りたいと思ったという。

その思いは、ポル・ポト時代の文化破壊を生き延びた一本の恋愛映画をめぐる人間模様を描く、本作の丁寧な映画作りに生きている。平和なカンボジアの田園風景の中で展開する美しい村娘と王子と村の若者との恋の物語。一九七五年のポル・ポト軍侵攻の前年に作られたその映画『長い家路』は、しかし、最後の巻が失われており、恋の結末はわからないという設定だ。

プノンペンに住む女子大生ソポンは、

粗野で厳しい軍人の父親に反発して、授業をさぼり、男友達のバイクで夜の街を遊び回る毎日。家には心身を病む母親と優等生で口うるさい弟がいる。ある夜、友達とはぐれて迷い込んだ廃墟の映画館で、なぜかスクリーンに自分とそっくりな少女が映っていて驚く。壁にはスター女優だった若き日の母親が微笑むポスターが。まるで生きる屍のような現在とはまったく違う、生き生きと輝いている若き日の母の姿に目を見張るソポン。それはかつてのクメール王国を舞台にしたおとぎ話のような愛の映画だった。ただ、最終巻が失われているために、この恋の行方はわからないのだが。この映画を母に見せたらどんなにか喜び、元気を取り戻すだろう。ソポンは夢中でのそのアイデアの実現に向けて動き始める。

ソポンは大学の映画学の教授に励まされ、失われた映画の最終部分を現在

の映像技術で新たに作り足すことを思いつく。映画学科の学生たちの協力も得て、ソポンは自ら村娘の役を演じつつ映画作りに挑戦する。映画作りを進めるうちに、ソポンは知らなかった過去の出来事を次々に知るようになる。映写技師からも秘められていた驚きの事実が。誰も話したがらない、忘れてがっているポル・ポト時代のつらい記憶。生き残った被害者はもちろん、加害者だった側にも複雑でつらい事情があり、いま悔悟や孤独に苦しむ者も。複雑に絡み合う人間ドラマの中で、登場人物はだれもが深い心の傷を抱えている。それが歴史の悲劇なのだ。

「大人が語らなければ、若者は自分の国はどんな国なのかわからないままに成長してしまう」。映画作りを通してソポンが自国の過去を学ぶ姿は、現在監督自身が実感している強い思いの表れだ。「つらくても、過去を乗り越えてこそ前進できる」と。最初の反抗的なグレた少女から、映画作りに向かって周囲を巻き込み、協力しながら前向きに力強く自立してゆくヒロイン。過去の悲劇を乗り越え、克服することで未来を切り拓こうとする女性像は、国を超えて共感を呼ぶ。アジアにまたひとり、強力な女性監督の誕生である。

『シアター・プノンペン』

カンボジア映画 (105分)

監督：ソト・クオーリーカー

出演：マー・リネット、ディ・サヴェット、ソク・ソトゥン、
トゥン・ソービーほか

7月2日より岩波ホールにて公開

©2014 HANUMAN CO., LTD / パンドラ配給

